

大国主神おおくにぬしのかみは、「日本神話」における重要な神で、天照大御神が『天つ国(高天の原)の代表』神であるのにたいし、『中つ国(地上・国土)の代表』と言える神です。今日、出雲大社と大神おおみわ神社の祭神として知られています。

(「古事記」上巻と「日本書紀」神代 における話。「記紀神話」)

そして、「万葉集」は、この神話の成立時期と同時期に詠まれた歌を収集しています。万葉歌において、この神は、「大汝(大穴道)・オホナムチ」と呼ばれます。また、常に

(「記紀神話」は、この神を、5つ程の別名でもって語っている。)

「少彦名・スクナヒコナ」の名を持つ小神と一緒に登場し、4首に詠われています。「大汝少彦名(オホナムチ スクナヒコナ)」と、「歌」に詠んだり、その「歌」を享受した万葉の人々の、「大国主神」に対する認識やイメージがどのようなものであったのかを探りました。

次の歌は、大国主神(以後大国主と呼ぶ)を詠んだ最初の歌です。

① 「人麻呂歌集・略体歌」『羈旅作』にある歌

「大穴道おほなむち 小御神すくなみかみの 作らしし

妹背いもせの山を 見らくしよしも」 (巻7—1247)

「大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉」

(その昔、大国主と少彦名の二神がお作りになった妹と背の山、この山を見るのは何とも言えず素晴らしい。)

「略体人麻呂歌集」の歌は、柿本人麻呂が若い頃に集めた歌、又は、人麻呂自身の作と言われます。

歌は、“大国主と、小御神(少彦名神)(以後小彦名と呼ぶ)が、山を作られた”と詠んでいます。この後に成立する「記紀神話」には、その記述は見られません。「国を作り堅める」「国造りをする」とは記していますが、如何にして「国造り」を行ったのかを具体的に語ることはしていません。

国造りの具体例が垣間見えるのが、「古事記」(713年)とほぼ同時に成立した「風土記」(713年以降)における記事の中にあります。(「風土記」は、各国府から報告された「地誌」で、その地方の山川原野の名前の由来や、古老が伝える珍しい話し等も報告している。現存するのは僅か5国(出雲、播磨、豊後、肥前、常陸)のもの。)その中で、「播磨国風土記」が、「大汝命」と書記して、大国主にまつわる7つの説話を伝えています。

中に、大国主が、少彦名と一緒に行動した説話が3つ含まれます。

(「少日子根命・少比古尼命」と書記している。)

例えば、オホナムチは、飾磨郡(しかまのこほり・姫路市)において、14の丘の名前の起源に関わっている記事。そのうちの「筥はこ丘(後に、男山)」では、オホナムチスクナヒコネが「日女道ひめじ丘(後に、姫山)」の神と会う約束をした時、日女道丘の神が、食物と米の入った筥を準備した、との記事があります。

また、揖保郡いほのこほりに於いて「御橋山みはしやま」と言うのは、オホナムチが、“俵たわらを積み上げて天にも届く橋を立てた”その山である故と語り、

オホナムチがスクナヒコネと相談して、稲種を持って来て積み上げたのが「稲種山いなだねやま」とも語っています。

そして、かなり遅れて出された「出雲国風土記」は、“止むを得ない事情”で、伝承説話は語らないと言いますが、“オホアナモチと少彦名が天下を巡行した時、稲種を落したのでその地を多禰たね(出雲国飯石郡の多禰郷)と言う”など、地名の由来に関連する大国主の記事があります。出雲国では、この神は、「所造天下大神大穴持命あめのしたつくらしおほかみオホアナモチのみこと」と呼ばれ、書記されています。

(他に、この二神が登場するのは、伊予国と伊豆国の「風土記・逸文」にあり、この温泉は、“二神が、病氣治療のために引いた”と言う。)

この様な出雲や播磨における大国主の伝承は、大和の朝廷や畿内の官人たちの間では、律令制が敷かれる頃(7世紀中・後期)には、広く知られていたと見られます。

(中大兄・天智天皇が詠んだ「大和三山の妻争い」の歌(13番、14番)も、播磨国の伝承(出雲の神が、大和三山の争いを諫めようとやって来た。後に「風土記」に。)を、踏まえてのものと見られている。)

この歌「大汝少彦名、」は、当時、出雲や播磨に伝承されていたこの二神の活動が、反映されたものと見えます。(但し、畿内の国々への伝承の中身については不明。)歌の作者は、「大国主神」を、“神代の時代、出雲に降り来て、少彦名の助けを借りて各地に稲作をもたらし、開拓したその地の山や丘に名前を付けた神”と見ていたと思います。

作者は、今、目に入った一對の山・「妹山・脊山」と、伝え聞く一對の神「大汝・少彦名」の行為を、共に悠久のものと感じて、この土地を褒め、旅する人を励ます歌に仕上げたのだと思います。

尚、「妹背山」については、吉野川の上流にも同名の二山があり、この歌は吉野のそれであったとも見られます。しかし、持統朝の頃からは、紀ノ川の川岸左右にそびえる妹山と背山を、「妹背山」と呼び、紀伊路の名所となっていたことが見られます。

(阿閉皇女・後に元明天皇、紀伊行幸の時、脊山を詠んだ歌がある。35番)

以下の3歌は、奈良時代中期の作。(既に、「記」「紀」「風土記」が完成している。)

先述した人々の「大国主神」観を、後の「歌」を通して、更に検討します。

- ② 冬十一月(730年)に、大伴坂上郎女、帥そちの家を発ちて道に上り、筑前の国の宗像むなかたの郡 名見なご山を越ゆる時に作る歌 (巻6—963)

「大汝おほなむち 少彦名すくなひこなの 神こそは 名付けそめけめ 名のみを

名見山なごやまと 負おひて 我が恋の 千重ちへの一重ひとへも 慰めなくに」

(この名見山は、大国主と少彦名の神がはじめて付けられた名前なのでしょうが、心がなごむと言う名見山の名を背負っているばかりで、私の苦しい恋心の千のうちの一つさえも慰めてくれない。)

「名見山」は“大汝・少彦名がはじめて名付けた山”、との伝承の有無は不明です。

この地の神、宗像の三女神は、“天照大御神と須佐之男命すさのをのみこと(大国主の先祖とも義父とも言う)が、お生みになった(誓約うけいにより)”と「記紀神話」は、言います。

宗像の神が先に、「名見山」を作り名付けておられたのではないかと。

(但し、後に大国主は、時を超えて来たのか、宗像三女神の一人を娶ります。「記」坂上郎女は、単に、名見山の名前から、紀ノ川の下流にある名草山なぐさやまと、その歌\*を思い出した。同時に、中流にある妹背山をも想い浮かべた。そこで、かねてから①の「大汝少彦名」の歌詞が古い土地柄を表現するのにふさわしいと感じ納得していたので、それらを合わせて、自らの歌にまとめて見せたのだと思います。

(とは言え、郎女は、妻を亡くした兄・大伴旅人のために、はるばる太宰府まで来ていました。

いよいよ都へ戻る途上では、色んな思いがあつて、慰めを求めていたとは思いますが。)

(\*名草山の歌。奈良時代、作者不明、羈旅『南海道』作の一つ。「名草山 言ことにしありけり 我が恋ふる 千重ちへの一重も 慰めなくに」(巻7—1213)。そして、ここには、妹背山を詠んだ歌が5首もある。)

- ③ 生石村主真人おひしのすぐりまひとが歌 (738年頃)

「大汝おほなむち 少彦名すくなひこなの いましけむ

志都しずの石室いはやは 幾代いくよ経へぬらむ」(巻3—355)

(大国主と少彦名の神が住んでおられたであろうこの志都の岩屋は、それから一体どのくらいの年月を経ているのだろうか。)

「志都の石室」の所在地については諸説あります。島根県大田市静間町の魚津に

は“日本海に面した入り江に、ぽっかりと二つの入り口が空あいた洞窟”があると  
言われ、“江戸時代初期の大津波で破壊される以前は、横幅30m奥行45m高さ15  
mの洞窟であった。(大田市教育委員会)”と言われます。\*

これこそが、この歌の作者が見た「志都の岩屋」だと思います。

作者・生石村主真人については、「村主」の姓かばねを持つことから渡来系の官人と言  
われます。官用で旅した出雲の地では、土地の人が語る大国主の説話も、耳にしたと  
思います。海岸で、この洞窟を見た時、その感動を歌にしようとして、思い浮かんだの  
は、やはり①の歌の「大汝少彦名」の歌詞であった。

加えて、自分の先祖が、この海を渡ってやって来たことを思い、この二柱の神は、大  
昔、“稲種”を持って、遙か海の彼方から来て、この海岸にたどり着き、この岩屋に先  
ず住まわれたのであろうと想像したのだと思います。

(少彦名は、出雲の海岸へ植物の殻で作った小舟に乗って来て、大国主と出会っている。

また、“須佐之男命は、高天原を追放されて、新羅の都へ降りたが、その地を嫌って海を  
渡って出雲の国へ来た”旨の話しがある。「紀」に、一書(異伝)の一つとして記される。)

\*由良薫氏による「志都の石室 伝承地を検分」(洞窟環境 NET 学会紀要)より引用。

#### ④ 史生ししょう 尾張少咋おはりのをくひを 教え諭さすとす歌一首 (749年)

(長歌の冒頭部のみ。題詞は省略)

「大汝 少彦名の 神代より 言ひ継ぎけらく 父母を 見れば貴たふとく  
妻子めこ見れば 愛かなしくめぐし うつせみの 世の理と かくさまに 言ひける  
ものを、、、」 (巻18—4106)

(あの大国主と少彦名の神がおられた神代の時代から、言い継いできたことは、

「父母を見ると尊いし、妻子を見ると愛しくいじらしい。これが世の道理なのだ。」

このように言って来たものであるのに、、、)

作者は、大伴家持。家持が国守として越中国に赴任していた時、この地の遊行女婦に  
浮気して深みにはまっていた部下・尾張少咋に対し、この歌を詠んで諭したものです。

(「題詞」には、官人の服務規程・罰則などが示されている。)(史生は、書記官、雑務係)  
神代において、「人の道、道徳」が説かれていたように詠っていますが、そのような伝  
承があったとは思えません。(「記紀神話」には見えない。)

家持は、部下も知っている「大汝と少彦名」また「仲良く向き合う妹背山」の①の歌も  
ある、これらを譬えに持ち出せば、より理解し納得してくれるであろうと考えた。

そこで、自身の「倫理観」をもとに、分かりやすい歌にして伝えたのだと思います。家持は、晩年に春宮大夫(皇太子・早良親王の教育係)に昇進した時期には、「古事記神話」を読む機会があったとも思われます。とすれば、“あの時の歌の「大汝少彦名」は、適切な引用の仕方とは言えないな”と思ったのではないか。

何故なら、大国主は、「葦原醜男あしはらしこを」や「八千矛やちほこ」の神とも呼ばれ、あちこちで多くの女神に求婚し、多数の子神をもうけています。そのため、正妻のスセリヒメは嫉妬し、大国主は手を焼いたとも言います。(「古事記神話」、「歌謡」など。)

後の歌人たちにおいても、「大国主神」にたいする認識やイメージは、「記紀神話」に依拠するものではなかったことが見られます。

「記紀神話」の内容は、人々に殆ど知られていなかった。人々に知らせ広めることを意図するものではなかったことが窺えます。

万葉の歌人たち(土地の古老たちも含め、)は、先述したような「大国主神」観に加え、この神に対して、次のようにも感じていた、と考えました。

今ここには、“我々が自ずから体感し畏敬する神”“大自然の中におられて、各地の山や杜などに降りて来られる神”が存在する。「大国主神」は、そんな神とは異なる、別の神である。この神は、“「神代」にお生まれになり、「神話」の中で活躍される神”なのだ、と。また、その「神話」は、人が語ったものであるから、私が語ることも許されるはずだ、と感じて語っていた、と思います。

- 主な参考文献
- ・伊藤博 「萬葉集・釋注」 集英社
  - ・蓮田善明 「古事記・現代語訳」 岩波書店
  - ・宇治谷孟 「日本書紀 上・現代語訳」 講談社学術文庫
  - ・植垣節也 他 日本の古典をよむ3 「風土記」 小学館
  - ・神田典城 「古風土記の大国主神」考 学習院女子短大 国語国文論集18
  - ・国学院大学古事記学研究センター「古事記研究データ」「古事記原文」
  - ・人文研究見聞録ブログ 播磨国風土記、出雲国風土記 現代語訳



出雲大社の大国主神の銅像



静の窟 (島根県大田市静間町) 清水翼氏撮影